

# 太宰治『右大臣實朝』研究

——語られない対象（実朝）——

## 序論

太宰治『右大臣實朝』は、太平洋戦争末期にあたる一九四三年、作者三五歳の年に錦城出版からの執筆依頼を受け、書き下ろしの単行本として同社から出版された小説である。本作は執筆資料に『吾妻鏡』、『金槐和歌集』、『承久軍物語』、『増鏡』の他、鶴岡八幡宮より刊行された雑誌『鶴岡』の源実朝特集号を使用したとされて<sup>1</sup>おり、鎌倉幕府三代將軍源実朝とその時代を、近習の一人称独白体によって描く。

語り手として設定された近習は、作品冒頭部において「おたづねの鎌倉右大臣さまに就いて、それでは私の見たところ聞いたところ、つとめて虚飾を避けてありのまま、あなたにお知らせ申し上げます」<sup>2</sup>（傍線は論者による。以下同様）、「故右大臣さまがお亡

奥村七海

くなりになられて、もうかれこれ二十年に相成ります」という二つの言葉と共に作品を展開していく。引用から、語り手による回想の物語であることが明らかであり、すでに「虚飾を避けてありのまま」の実朝像は成立し得ないと言える。語り手である近習の視点は、実朝を「神さまみたいに尊く有難い<sup>3</sup>」ものとして捉える一方で、自身の語りの中に、実朝を「白痴<sup>4</sup>」として捉える公暁、北条氏の視点、市井の噂、『吾妻鏡』の記録といった、実朝に対し向けられた他者の視線を作品全編に亘って取り入れていく。

また、一人称の語りによって展開された作品は、『吾妻鏡』、『承久軍物語』、『今鏡』といった他のテクストの引用によって閉ざされる。近習は、「つとめて虚飾を避けてありのまま」実朝を語る読者へ宣言しながら、語りという行為を放棄していく語り手である。本稿においては、語り手による語りの放棄を中心として、〈語

られるべき対象)がいかにして(語られない対象)へと変容していったのかを考察したい。

### 一 『吾妻鏡』と近習の語り

本テキストは、語り手である近習の独白、鎌倉時代成立の歴史書『吾妻鏡』による引用の二つの要素によって構成される。作中で使用される『吾妻鏡』は、一九三九年から一九四四年にかけて書かれた、龍肅訳『吾妻鏡』(全五巻、一九三九年〜一九四四年/岩波文庫)を出典とするが、引用された『吾妻鏡』と書籍の本文との間に異同が見受けられる事は先行研究が指摘してきた通りであり、『吾妻鏡』本文を引用する段階から、太宰による取捨選択と、改変を踏まえている事は明白である。さらに、引用された『吾妻鏡』は、太宰によつて設定された語り手、近習のによつて正史から稗史へと、その性質を変換されていくのである。本稿においては、『吾妻鏡』本文の選択、改変については触れず、語り手によるテキストの変換について、本文を引用し、以下に考察する。

①十六日丙戌。午剋。問註所入道名越家焼亡。而於彼家後面之山際構文庫。將軍家御文籍。雜務文書。并散位倫兼日記已以下累代文書等納置之處。悉以為灰燼。善信聞之。愁歎之餘。

落涙數行。心神為惘然。仍人訪之云々。(『吾妻鏡』六三九頁)

②問注所の善信入道さまの名越のお家が焼けたのは正月の十六日、私はその三日あとに父に連れられ御ところへあがつて將軍家のお傍の御用を勤める事になったのですが、あの時の火事で入道さまが將軍家よりおあづかりの貴い御文籍も何もかもすつかり灰にしてしまつたとかで(後略)

(『右大臣實朝』二三三頁)

③たいせつの御分籍をたくさん焼かれても、なんのくつたくも無げに、私と一緒に入道さまの御愁嘆をむしる興がつておいでのやうなその御様子が、私には神さまみたいに尊く有難く、ああもうこのお方から死んでも離れまいと思ひました。

(『右大臣實朝』二四頁)

右の引用は、それぞれ『吾妻鏡』原文、③・④は『右大臣實朝』の本文テキストである。「問注所」の「善信入道」の家が焼け、幕府より預かった「御文籍」を「すつかり灰にしてしまつた」出来事について、『吾妻鏡』では「落涙數行。心神為惘然。」と「問注所入道」の様子をはつきりと示しながらも、実朝の様子を記載しない。『右大臣實朝』においては『吾妻鏡』本文と同様、「問注所入道」の「愁嘆」を描きながら、「御文籍」が焼かれたことに対して拘泥せずに近習とともに「につこりお笑ひ<sup>7</sup>」になつて「興がつて」いる実朝の様子が示される。重要であるはずの文書が焼失し

たにもかかわらず、善信入道の様子を「興がつて」いる描写は、世俗的な思考から自由である実朝をあらわにすると同時に、承元二年当時一四歳であった実朝の、「くつたく」の無い様子を描き出ししていると見えるだろう。さらに、序において指摘したとおり、近習の語りは実朝の死後「二十年」を経て展開される語りであり、この語りには近習の意図を内包していることは明らかである。近習は、作品の開始に伴い、すでに実朝を「神さまみたいに尊く有難」い存在として構築し始めているのだ。

ここで語られる実朝はすでに正史上の実朝ではなく、『吾妻鏡』には記載されない、『右大臣實朝』における「將軍家」である。この作品における実朝は、史実に対して行われた太宰治による脚色によつて造形され、演出される、きわめてフィクション性の強い人物として考えることが出来るだろう。

以上を踏まえれば、太宰が実朝を書くにあたり、『吾妻鏡』に見られない実朝の様子を創作し、『吾妻鏡』に見られなかった実朝を描く作品が『右大臣實朝』である事がわかる。また、漢文によつて記録された『吾妻鏡』を、口語として再構築する過程を明らかにしていく近習の語りは、正史を稗史へと変換し、『吾妻鏡』本文中において歴史として埋没していく実朝のすがたを、人物として前景化する役割を持つと言える。

一方で、漢文体の記録により、正史として流布してきた『吾妻鏡』については、小林秀雄『実朝』に次のような指摘がある。

文章というものは、妙な言い方だが、読もうとばかりしないで眺めていると、いろいろな事を気付かせるものである。書いた人の意図なぞとは、全く関係ない意味合いを沢山持つて生き死にしている事がわかる。北条氏の陰謀と「吾妻鏡」編纂者等の曲筆とは、多くの史家の指摘しているところで、その精細な研究について知らぬ僕が、今更かれこれ言う事はないわけであるが、ただ、僕がここで言いたいのは、特に実朝に関する「吾妻鏡」編纂者等の舞文潤色は、編纂者等の意に反し、義時の陰謀という事実を自ら臭わしているに止まらず、自らもつと深いものを暗示しているという点である。

（『実朝』<sup>8</sup> 一九四頁）

小林秀雄が指摘する通り、多くの研究者たちが論じてきた北条義時による実朝暗殺の陰謀説について、『吾妻鏡』にはその詳細が明記されておらず、あくまで公暁の叛逆による暗殺事件としての体裁をとる。しかしながら、実朝暗殺事件の起きた時刻に実朝の傍から姿を消していたのは他でもない北条義時であり、この後で政権を握る存在もまた、北条氏である。こうした点から、曲筆の指摘は免れないものであり、『吾妻鏡』のテクスト自体が、北条氏

の政権下に成立したにもかかわらず、「北条氏の陰謀という事実」をほのめかしながら、現代に至るまで史料として読み継がれてきたのである。「吾妻鏡」は先述のとおり、漢文体による記録文書であり、歴史上の事実として捉えられてきた事は明らかである。一方で北条氏の権力下において記された歴史である以上、「吾妻鏡」における記述が事実のみであるとは言い難い。記録者が全ての事実を記録することが不可能である以上は、これまで正史として、あるいは事実として捉えられてきた『吾妻鏡』において、「実朝」の実像は省略され、隠蔽され、不在の対象へと変化せざるを得なかったと言えるのではないだろうか。以上の点について、実朝就任以後の鎌倉幕府の政治中枢における、実朝の位相についても、同様の指摘が出来る。

## 二 実朝の位相と取り込まれる〈嚙〉

実朝が將軍へと就任した背景に、北条氏、比企氏の対立である〈比企氏の乱〉が挙げられる。この戦乱は、危篤状態となった頼家が、息子の一幡と弟である千幡（後の実朝）の両者に地頭職を譲り渡したことに端を発し、北条氏と比企氏の勢力が対立した戦である。比企氏の敗北と、頼家の幽閉によって、北条氏が千幡を擁立し、三代將軍源実朝の就任とともに北条氏が幕府権力下におけ

る地位を絶対的なものとしていったことは、「以畠山次郎重忠餘黨等所領。賜勲功之輩。尼御台所・御計也。將軍家御幼稚之間如云々」<sup>(9)</sup>（畠山次郎重忠の殘党らの所領を勲功のある者に賜った。尼御台所のお計らいであった。將軍家（実朝）が幼いので、このようにしたという）<sup>(10)</sup>という記録からもうかがい出来るであろう。十二歳にして鎌倉幕府將軍となった源実朝が、北条政子、北条義時といった北条家の人物から政治的干渉をうけていたことは記録の上にも明らかであり、幼い実朝に政治的権力はなかったと言えるほか、外戚である北条氏がほとんど当時の政治の中心にいたと考えられる。実朝について、北条氏によって將軍として擁立された点、外戚による政治が行われていた点から、祭事的役割が強く、実権を持たなかった將軍としての見方が歴史学的見地から多く論じられてきたことは、多くの研究者が指摘するとおりである。

さらに、比企氏の乱、和田氏の乱といった続く近臣たちの叛逆から、常に政治的中心の立場を脅かされ続けてきた將軍であったと考えることも可能ではないだろうか。実朝以後の政治を北条氏による執権政治が担っていくことから、北川透氏が「不気味な魔物の影——戦時下の『右大臣實朝』——」<sup>(11)</sup>において指摘する通り、実朝は北条氏の政治を成立させるべく推挙された「政治的傀儡」

としての見方が出来、北条氏によって利用される立場であったことが推測できる。比企氏、北条氏の争いの中で將軍となり、和田氏による反乱、北条氏による政治的実権の占有の中で將軍として在位し続けた実朝は、政治的な陰謀の中心にあつて、常にその抗争からは疎外されてきた人物であると同時に、政治的な抗争の中心である幕府において、常に自身の立ち居振る舞いの選択を強いられ続けてきた人物としても考えられる。和歌、管弦への傾倒、厩戸皇子への関心をはじめ、義時の諫言から弓馬の催しを行う実朝の記録などは、その例として挙げられるのではないだろうか。

こうした実朝の不確定ともいえる位相を端的にあらわしているのが、本テクストの語り手によつて読者へと提供され続ける〈噂〉の言説である。

人によつて、さまざまの見方もあるでせうが、私には、ただなつかしいお人でございます。暗い陰鬱な御性格であつたと言ふひともあるでせうし、また、底にやつぱり源家の強い氣象を持つて居られたと言ふひともございませう。文弱と言つてなげむたひともあつたやうでございますし、なんと優雅なと言つて口を極めてほめたたへてゐたひともございました。けれども私には、そんな批評がましいこと一切が、いとほしく無禮なもののやうに思はれてなりません。(中略)わが貧し

い凡俗の胸を尺度にして、あのお方のお事をあれこれ推し測つてみたりするのは、とんでもない間違ひのもつてございませう。

〔『右大臣實朝』二二三、二一四頁〕

右の引用は、作品冒頭部において、近習が実朝にまつわる「さまざまの見方」を挙げた箇所である。この「さまざまの見方」は、『吾妻鏡』の記述としての言説、語り手によつた評価ではなく、「人」すなわち幕府内外の他者による評価として語られる。近習は、実朝を「ただなつかしいお人」として定義した上で、「人」による「見方」を四例挙げる。(噂)による評価を部類すると、「源家の強い氣象を持つて」いたとするもの、「なんと優雅な、と言つて口を極めてほめたたへてゐた」という評価から、「肯定的な噂」、「暗い陰鬱な性格」とする評価、「文弱」の評価から、「否定的な噂」の二種類として捉えられる。(肯定的な噂)については、実朝を「神さまみたいに尊く有難」い存在として捉えようとする近習の視点に類似した、実朝を極端に絶対化する視点として考えられる。一方、(否定的な噂)については、実朝を「白痴」としてとらえ、近習の語りを相対化していく北条氏、公暁の言説に類似する視点といえるだろう。この四つの評価が、初めに近習の口から語られる、他者の視線から見た実朝像である。この「人によつ」た「さまざまの見方」は読者に対し、これから語る実朝という対象を定義す

る評価でありながら、同時に、「そんな批評がましいこと一切が、いとはしく無禮なものやうに思はれてなりません。」の一言によって、これらの〈噂〉を覆す近習の語りを展開されることを意味づける。近習の語りはこのどちらにも属さず、いわば太宰が、『右大臣實朝』にまつわる著作、『鐵面皮』のなかで、「歴史の人物と作者の差を千里萬里も引き離さなければいけない」と「私」に語らせたとおり、市井一般の視線、あるいはそうした世俗的価値観から逸脱した存在としての実朝像を作り出す語りであると言えるのではないだろうか。

一方で、こうした〈噂〉の数々は、実朝がいかに不確定であり、いかに不透明であるかを読者の側に浮き彫りにしていく。さらに、〈噂〉を否定していく近習の語りについては、吉田熙生氏が指摘する、「讚美の念で絶対化され、奇妙に平面的」な語り、「作者の讚美の心情、口ぶりのみが露出している」といった作品の受容を超越し、実朝という不透明な対象へ、きわめて客観的に対峙するとともに実朝を「押し測」ることの出来ない人物として補強する。加えて、近習の語りは、肯定的、否定的の両極端にある噂を挙げ、それらを否定していくという過程を通じて、実朝像を「神さまみたいに尊く有難い存在として形象し、〈絶対化〉していくと考えられる。近習の語る実朝については、対象を〈理想化〉〈絶対化〉

した語りであるという点について、先行研究に指摘されてきた通りであるが、〈否定的な噂〉、〈肯定的な噂〉の二つにおいて、これらを否定する近習の語りは極めて冷静な性質を持つ視点によるものであり、実朝を神格化も俗物化もしない視点にある。実朝、北条氏を作品内に描きながら、『鐵面皮』に言及された「新講談」の登場人物のような、歴史上の人物に対する俗物化を避けるには、市井の〈噂〉を語ることに、あるいは、〈噂〉を持ち出しながらそれらを否定する事で人物を構成せざるを得なかったと考えられる。また、この段階で対象が相対化されていくことは免れないといえ、「つとめて虚飾を避け」た語りの成立は〈噂〉の介入によってはじめて達成され、またそれら〈噂〉の否定によって、近習の「虚飾」による語りである可能性も免れないという矛盾を孕んだ語りとなる事がわかる。

また、実朝に対する近習の視点は、作品内に描かれる和田氏の乱以前、以後で変化していく性質のものであると考えられる。次章において、変容する対象としての実朝を捉え、考察する。

### 三 変化する対象〈実朝〉

以上、『右大臣實朝』における実朝が、『吾妻鏡』の裏付けとともに、近習の語り、第三者による〈噂〉と語り手によるその否定

による人物形象の補強によって語られる点について論じた。さらに、実朝に付随する「噂」には、①「肯定的な噂」、すなわち実朝を「人格化」、(理想化)していく「実朝讚美」とも捉えられる近習の側に寄った視点によるものと、②「否定的な噂」によって実朝を「俗物化」する、作品終結部において実朝を「白痴」として表現する北条氏、公暁の側に寄った視点によるものが存在する点に触れた。この二点から、実朝の「噂」に対する近習の否定が、実朝の変化に伴い、その性質を弱めていくものであるという仮定について、和田合戦をひとつの契機として捉え、検証していきたい。実朝に対する作品冒頭部においての「肯定的な噂」に偏った評価と、作品終結部に近づくにつれ、近習の言葉が語る実朝のなかに「否定的な噂」の視点が混ざり始めることを踏まえ、以降に近習の語りを引用する。

(前略) 將軍家の御胸中はいつも初夏の青空の如く爽やかに晴れ渡り、人を憐むとか怨むとか、怒るとかいふ事はどんなものだか、全くご存じないやうな御様子で、右は右、左は左と無理なくお裁きになり、なんのこだはる所もなく皆を愛しなされて、しかも深く執着するといふわけでもなく水の流れるやうにさらさらと自然に御擧止なさつて居られたのでございませうから、その日、相州さまに仰せられたことも、ほかの意

味など少しもなく、ただ、あの御靈感のままにきつぱりおつしやつただけのことと私は固く信じて居ります。

(『右大臣實朝』四十一頁)

右に引用した箇所は、北条義時による諫言から執り行われた弓馬の催しの催しの後、義時が実朝に政務の決裁を求めた際にみられる近習の語りである。義時の要求に対して下された実朝の、「自然」な「御擧止」を「御靈感」と形容し、加えて実朝の心中を「初夏の青空の如く爽やかに晴れ渡り、人を憐むとか怨むとか、怒るとかいふ事はどんなものだか、全くご存じないやうな御様子」と語る。語り手が対象を「神様みたい」な人物と演出する語りである箇所は他にも確認できる。こうした近習の演出は、実朝を「絶対化」する視点による語りであり、「噂」を否定する近習の語りが、①「肯定的な噂」の視点に偏る描写であるといえる。和田合戦以前の实朝の行為に対し、和歌、政治に関する描写にこうした「靈感」の描写は散見され、この描写に対する義時の行動は、和田氏の乱以前の实朝の行動とともに始終一貫している。

しかしながら、こうした実朝の描写は、和田氏の乱を契機として急減し、実朝の描かれ方は次第に「神様」のような人物形象から外されていくと考えられる。実朝を取り巻く状況の変化が、実朝の行動に反映されていくことは明らかであり、実朝の行動の変

化によって、近習は実朝に対する評価を変化させていく。

さうして一年経ち、二年経ちしてゐるうちに、勘の鋭い將軍家の事でございますから、或ひは和田氏あたりが老いの一徹から短慮の眞似をしでかすのではあるまいか、との御懸念も生じてまゐりました御様子で、(中略)もうその時すでに、將軍家も、いまはこれまで、とお見極めをつけておしまひになつたのではないでせうか、あの頃から、御政務の御決裁に當つても以前ほどの御熱意は見受けられず、まるで御冗談のやうに矢鱈に謀逆の囚人たちを放免させてお笑ひになつてゐるかと思ふと、急にがくりとお疲れの御様子を御示しになつたり、それまで固く握りしめなされてゐた何物かを、その時かりりと投げ出しておしまひなごつたやうな、ひどい御氣拔けの態に拝されました。(『右大臣實朝』一一一、一一二頁)

近習が「重大の轉機がおありになつた」<sup>(16)</sup>と考えるように、実朝は和田合戦の前後で語られ方が変化していく。「いまはこれまで、とお見極めをつけておしまひになつた」実朝は、「それまで固く握りしめなされてゐた何物かを、その時からりと投げ出しておしまひなごつたやう」と形容される。この明らかな変容を契機とし、「將軍家御發狂かと疑はれましたほど」<sup>(17)</sup>の様子を周囲に示し、「御政務の御決裁にもほとんど御興味を失はれたやうに見受けられ、

相州さまと入道さまに一切お任せの様子」<sup>(18)</sup>となる。また、「仙洞御所」<sup>(19)</sup>への官位の催促も和田合戦以降の描写であり、「和歌管弦」<sup>(20)</sup>へ対するいつそうの傾倒が、後々の北条氏、公暁の「白痴」の視線を形成していったと考えられる。

和田氏の謀反に伴い決定的なものとなつた北条氏の政治権力の掌握によって、幕府における実朝の地盤が揺らいだことは明らかであり、この和田合戦から、それまでの「神様みたいに尊く有難い姿を剥奪されていくことになる。これまで〈絶対化〉のフィルタを介し語られていた実朝が、近習による否定を介さない〈噂〉の言説、そして近習自身の語りによって「白痴」として規定されていくのである。この「白痴」の規定は、北条氏、公暁によるものである。

① 「それは、將軍家の前では別だ。あの時だけは全く閉口だ。自分のからだだが、きたならしく見えて来て、たまらない。どうも、あの人は、まへから苦手だ。あの人は私を、ひどく嫌つてゐるらしい。」

私|は|なん|とも|お|答|へ|でき|ませ|ん|で|した|。

(『右大臣實朝』一六三頁)

② 「みんな言つてゐる。相州も言つてゐた。気が違つてゐるのだから、將軍家が何をおつしやつても、さからはずに、はい



はいと言つてゐなさい、つて相州が私に教へた。祖母上だつて言つてゐる。あの子は生まれつき、白痴だつたのです、と言つてゐた。」

〔右大臣實朝〕一六八頁

作品終盤において、鎌倉を訪れた公暁は右に引用した通りに語る。公暁は実朝の前では「自分のからだだが、きたならしく見えて来て、たまらない」と語り、吉田熙生氏の指摘する「現世の悪臭」<sup>21)</sup>としての公暁の立場が明らかにされる場面であると同時に、実朝に付与されてきた「神さま」の性質と、公暁の「悪臭」とが明確に対比される場面である。さらに、公暁の二度目の鎌倉訪問は、近習の公暁との会話によつて実朝の矛盾が明らかにされる箇所としても捉えられる。以降の②の引用になると、吉田熙生氏の指摘した「現世の悪臭」である北条氏が実朝を「白痴」と規定していることが公暁を通して語られ、実朝のもつ「白痴」としての性質と「神さま」としての性質が対立する場面としてとらえることも可能である。この作品終盤の公暁との会話以降において、近習が実朝について「絶対化」を伴い語ることは少なくなり、公暁が口にした「白痴」という評価に対し、これまでの〈噂〉に付随してきた近習による否定は存在しない。近習と公暁が言葉を交わす以上の場面において、近習の語り、あるいは近習によつて形成された実朝の像に、その形象そのものを揺るがすほどの影響力を持つ

て他者の言説が介入したと言え、これまでの独白の中で様々な〈噂〉、近臣の言説、歴史書籍の引用を取り入れながら成立してきた〈実朝像〉に揺らぎが見え始める。「御發狂」などの言説によつて確かに近習の目にも認められていた実朝のもう一つの側面が、公暁の「白痴」という規定によつて読者の前に提示される過程を踏まえ、作品が「承久軍物語」<sup>22)</sup>による終結、すなわち近習による語りの放棄につながるのではないだろうか。実朝の性質が揺らいだ時、近習は実朝についての否定的な視点を拒むことが不可能となるのである。

#### 四 語られない対象〈実朝〉

本稿で論じてきた『右大臣實朝』における実朝は、第二章で指摘してきたとおり、北条氏をはじめとする近臣らの干渉、政治的思惑の中におかれ、比企氏の乱以降の北条氏専横の幕府において、自身の振る舞いを常に変えてきた人物といえる。和田合戦を契機として、幕府における北条氏のあり方と実朝の位相が揺らいだ時、実朝の振る舞いにはほころびが見られ、近習をして「終始變わらず將軍家を御信頼申し、お慕ひ申してゐながら、それでも、時たまふいと何とも知れず心細くなる場合がございます。」<sup>23)</sup>と言わせしめるほどの行き詰まりを露呈している。政務へ対する無関心には

じまり、官位の催促や渡宋の計画などの統一性のない興味の氾濫は実朝における境界の表れとして捉えられるだろう。これらの行き詰まりを指摘するのは、先行研究において「駆け込み訴へ」における（ユダ）的役割を担うとされてきた公暁である。公暁は、作品内において、和田合戦の以前、以後の二度にわたり実朝の前に登場する。近習は、実朝が公暁に向ける心情について次のように推測する。

（前略）この時、公暁禪師さまにはなんのお尋ねもなく、そのうへ少しお顔色がお曇りになつて居られるやうにさへ拜されました。ふいとその時思ひましたので、「ございますが、將軍家は、この卑しいつくり笑ひをなさる禪師さまをひどくお嫌ひなわけではありませんか、（中略）この公暁禪師さまの事になると奇妙に御不快の色をお示しになり、六年前に、禪師さまが御落飾の御挨拶にお見えになつた時にも、將軍家は終始鬱々として居られたし、（中略）その日も禪師さまが、おどおどして、きまりわるげなお態度をなさればなさるほど、いよいよ將軍家のお顔色は暗く、不機嫌におなりのやうに拜されましたので、これはひよつとしたら將軍家はこの禪師さまをかねがね、あきたらず思召しなされて居られるのではなからうか（後略）

『右大臣實朝』一五九—一六〇頁

引用部は、和田合戦以後、公暁が鎌倉を訪れた際の記述であり、実朝と対面した際の両者の様子を近習が観察し、語つたものである。本稿において、第二章で指摘した通り、公暁は実朝の神性と「白痴」の両方の性質を明らかにした人物である。その公暁に対し、実朝は、「將軍家は、この卑しいつくり笑ひをなさる禪師さまをひどくお嫌ひなではなからうか」と語らせるほどの嫌悪を示す。この公暁に対する嫌悪は、公暁の言説によつて成立する（対象を相対化する他者の視点）への嫌悪が書かれていると考えられるのではないだろうか。言い換えれば、実朝に付与した（絶対化）のフィルターを退ける存在としての公暁への、語り手自身の嫌悪とも考えられる。（絶対化）を介した実朝像に揺らぎをもたらす存在としての、公暁に対する近習の忌避が、実朝の表情を介して語られると考えてよいだろう。近習が取り入れた公暁の言説を通じ、実朝は近習が付与した（絶対化）のフィルターを取り除かれ、「神さま」と「白痴」の二面性を明らかにする。ここに見られるのは、他者の言説を挿入する事で生じる近習の語りの欠落であり、「つとめて虚飾を避けてありのまま」の実朝を語ろうとするに比例して、近習の選び取つた他者の評価によつて実朝の像は相対化されつづけ、（絶対化）は不可能なものとなる。さらに、先述した実朝の表情を介し語られる近習の忌避に加え、「將軍家御發狂」を語る近習

によつて見出される、実朝を避けた北条氏等の記述は、すべて近習の一人称の語りである。序論で触れた点について、再び立ち返れば、一人称による語りには語り手の意図が含まれていることが確かであり、この時点で公暁に対する実朝の視線と、北条氏による実朝への視線はどちらも近習の語りによるものであり、その意図が含まれていないとは言い切れない。すなわち、近習が他者の言説を取り入れ、実朝を語る時、その他者の行動、言説にも同様に近習の意図が組み込まれることになる。これらの点から「つとめて虚飾を避けてありのまま」に語ることは不可能になるのであるが、『右大臣實朝』においては語りの放棄以後も作品が続いていることが言える。近習の語りは、近習が「つとめて虚飾を避けてありのまま」の語りの遂行が不可能であることが明らかになつた公暁との対話の場面以前から、すでに語りを放棄する可能性を持つものであつた。近習は「虚飾を避け」た語りの実現に対し忠実に、『吾妻鏡』の引用、他者の〈噂〉、北条氏をはじめとする近臣らの言説を取り入れる。近習は和田氏、北条氏をはじめとする近臣の中に極めて公平な実朝像を作りだしたが、近習の語りはすでに彼自身の語りではなく、様々な視点を内包する語りとなつていったのである。様々な人物の視点を含んだ語りでは、『吾妻鏡』の記録、北条氏の政治的意図、さらには頼家の敵を討つ公暁の意

図を含む「ありのまま」の語りは不可能となる。さらに、実朝の表情を通じて、『吾妻鏡』に記述されなかつた公暁への嫌悪を明らかにした近習は、実朝の生涯における結末を語る、という行為を放棄し、『承久軍物語』による語りの終結を選び取つたのではないだろうか。

小林秀雄が指摘するように、『吾妻鏡』には筆者の創作による記述が多分に含まれているとされる。北条氏による執権の元で書かれた正史としての歴史書である以上は、実朝の死を、近年の歴史研究に言われる北条氏の政治的陰謀による実朝暗殺として書くことは不可能である。近習が実朝を語る時点においても、実朝の死後「二十年」であることから、北条朝直が評定衆に就任した一二三九年にあたり、北条氏の権勢は衰えていないことが分かる。以上を踏まえれば、近習がその語りにおいて実朝の死を北条氏の政治的陰謀として語ることは出来ないと言える。加えて、公暁、北条氏による「白痴」としての実朝の存在と、「神さま」として形容される実朝像二つを同時に語つた近習の語りは、近習の肯定しようとする〈絶対化〉された実朝を、他者の言説によつて〈相対化〉する。さらに、実朝の振る舞いは、二章にも指摘したように、和田合戦を契機として決定的な揺らぎを見せており、この揺らぎは、先行研究が指摘してきた近習の〈絶対化〉の語りによつてさえも

修復ができないものであったのではないだろうか。近習は公暁、北条氏による実朝の（相対化）を認めざるを得なくなつたと考えてよいだろう。すなわち、『右大臣實朝』において、対象が語り手の絶対的評価の範疇から逸脱した瞬間、既に語り手は作品内から対象を退場させることを意図して語りの行為に及ぶものの、自身の言説によって実朝を「ありのまま」に描き出すことが不可能であるという事実を浮き彫りにしていくのである。実朝の生涯における結末についての描写を控えることは、この実朝横死事件の真相を、北条氏陰謀説、頼家の仇としての暗殺のどちらかに属させることが出来なくなつた近習の姿を明らかにするとともに、『鐵面皮』に言及される、「歴史の大人物と作者との差を千里萬里も引き離」された人物としての実朝を書くためのこころみであつたと言える。さらに、実朝の言葉のみを片仮名に置き換え、周囲の人物の言葉との間に明確な距離を持たせた本作は、対象である実朝の実像を極めて不明瞭なものとして描き出すと言える。近習は作品のはじめから実朝の実像を語っていたとは言えず、実朝をはじめから語られることのない対象として存在していたと考えられるのではないだろうか。

## 結論

本稿の『右大臣實朝』研究において、近習の語りは『吾妻鏡』に記録として埋没された実朝をふたたび前景化し、「虚飾を避けてありのまま」の実朝像として再構成する目的を開始された語りである論じた。近習は、『吾妻鏡』のテクストにおいて、その作者の意図の下に記号化され、不明瞭な存在として形成された実朝の像を、近臣、市井の人々によって下される評価、噂に基づいて再構築していくのである。一方で、こうした多数の人々の言説を否定していく近習の語りは、実朝を絶対化し、実朝への「讚美」に終始するという指摘も免れない。これは一人称独白の形式の下に不可逆であり、結果として、近習は実朝を構成する（語り）という行為を放棄し、『右大臣實朝』という作品を既存のテクストによつて完結させるのである。実朝という対象を、「虚飾を避けてありのまま」語り得なかつたという事実は、以上の点から明白であるとと言えるだろう。

実朝という対象が、数多くの人物による評価および噂を含んで語られている点については、先述のとおりである。実朝は近習が実朝を語り始める作品冒頭部において挿入される、『吾妻鏡』と他の者の評価によつて、既に不確かな存在であつたといえ、実朝を（絶

「対化」しながらも、一方においてはあらゆる言説の挿入によって対象を相対化していく語りを成立させていくのである。さらに、和田合戦以降に散見される「御發狂」ともいうつる興味の氾濫と政治の放棄によって、実朝の位相はさらに複雑化し、「ありのまま」の姿をより見えづらくしていく。和田合戦を経たのち、公暁による「白痴」という認識の付与は、こうした実朝の「神さま」の側面を剥奪するには十分であつたと言えるだろう。しかしながら、「神さま」の側面を剥奪された実朝は、それでも作品からの退場を許されない。近習は語りの放棄に及ぶものの、「つとめて虚飾を避けてありのまま」という自身の宣言のもと、実朝を語るという点においてその死を『右大臣實朝』のテキスト上から除いてはならず、実朝の死は（語り）でなく（記録）によって表現されるのである。この語りの放棄と作品の継続こそが『右大臣實朝』の孕む矛盾であり、「けたはづれの神品<sup>23</sup>」としての「歴史の大人物」の限界であると言えるだろう。『右大臣實朝』を、近習の（語り）でなく既存の（記録）によって終結させる事は、実朝の像を際限なく不確かな対象として成立させる事に他ならず、実朝はこの不確かさによって、作品世界にある種の隔たりを有する人物として存在させられるのである。実朝は、いかなる視点を介しても語られることを可能とする対象であり、いわば（実像を結ばない対象）と

して表現され続けるのではないだろうか。仮に、近習の付与した神性のフィルターが、公暁が付与する「白痴」としての規定に入れ替わったとしても、テキストの存続は不可能ではない。近習の視線が失われたとしても、実朝の存在は不確定のままであり、「語られない対象」、（実像を結ばない対象）として作品世界の軸となっていくのである。

『右大臣實朝』における対象は、数多くの視線にさらされ続けることよつて、多面的な観察を許し、それゆえに限定することのできない対象として形成されて行く。こうした過程によつて実朝は、絶対化され「神さまみたい」という形容を付与されながら、相対化され、「白痴」としての像をも付与される。（実朝）は一人の内面に近しくも相反する両面を持ち合わせる像として形成されるのである。

すなわち、近習が「虚飾を避けてありのまま」を前提に置いたその瞬間から、主体と客体の言説によつて形成されていく実朝には、既に実像と呼べるものは存在せず、仮にテキスト内の実朝に実像が与えられているとすれば、それは後景化され、記号として記録に埋没されるべく、近臣をはじめとする数多の人々の認識によつて作り出された、歴史の一時期に存在する空洞であつたとすら言えるだろう。これらを踏まえれば、近習は、あまりに膨大な

〈実朝〉という記号の前に語りを放棄するという点においては敗北する語り手である。彼はこの敗北をもって実朝の絶対化が不可能であることを認めながらも、実朝の死に対する客観化を下さないことによつて、決定的な相対化すらもなさないままに作品を終結させるのではないだろうか。近習がいかなるフィルターを介して実朝を語ろうとも、それは空洞を語り続けていたにすぎず、〈語るべき対象〉としての〈実朝〉はすでに存在していなかったのである。

注(1) 津島美智子「實朝のころ」に「参考史料の他に、鎌倉八幡宮から十七年八月発行された、「鶴岡」の源實朝號といふ雑誌を机邊から離なさず之をノート代用にも用ひ、太宰が細字で澤山書入れたこの小冊子が、この頃の無二の記念として、今も残つて居ります。」(『太宰治全集7 小説6』四三〇頁)

(2) 『右大臣實朝』二二頁(作品本文の引用は、『太宰治全集7 小説6』筑摩書房一九九八年による。以下注記のない限り同様とし、作品名『右大臣實朝』とともに頁数を附す。)

(3) 『右大臣實朝』二二頁

(4) 『右大臣實朝』二四頁

(5) 『右大臣實朝』一六八頁

(6) 津島美知子『回想の太宰治』『右大臣実朝』と「鶴岡」人文書院、一九七八年(太宰にとつて大変幸運であったことは、「龍肅訳注『吾妻鏡』」の第四巻までが、岩波文庫本で既に刊行されていることである。)

(7) 『右大臣實朝』一三三頁

(8) 『小林秀雄全作品14』『実朝』二〇〇三年 新潮社

(9) 『吾妻鏡』六一七頁

(10) 五味文彦・本郷和人編『現代語訳 吾妻鏡7 頼家と実朝』吉川弘文館二〇〇九年(八一頁)を参考に論者の書き下し、以下注記のない限りは同様とする。

(11) 北川透「不気味な魔物の影——戦争下の『右大臣実朝』——」『日本文学研究(梅光学院大学紀要)』二〇〇〇年 梅光学院大学日本文学会

(12) 初出『文学界』一九四三年第十卷四号。(テクストの引用は『太宰治全集7 小説6』(筑摩書房 一九九八年)により、以下作品名『鐵面皮』とともに頁数を付す。)

(13) 『鐵面皮』九頁

(14) 吉田熙生「右大臣実朝——作品論」『国文学 解釈と教材の研究』學燈社、一九六七年より引用

(15) 『鐵面皮』九頁

(16) 『右大臣実朝』一一二頁

(17) 『右大臣実朝』一一六頁

(18) 『右大臣実朝』一二七頁

(19) 『右大臣実朝』一四六頁

(20) 『右大臣実朝』一三四頁

(21) 註一四に同じ

(22) 『右大臣実朝』一七七頁(以下承久軍物語に據る)

(23) 『右大臣実朝』一四〇頁

(24) 『鐵面皮』九頁

## 参考文献目録

## 辞書、事典

- ・『日本国語大辞典』小学館、二〇〇〇年～二〇〇二年
- ・『日本古代中世人名事典』吉川弘文館、二〇〇六年

- ・三好行雄編『太宰治必携』学燈社、一九八一年
- ・東郷克美編『別冊国文学47 太宰治辞典』学燈社、一九九四年
- ・神谷忠孝・安藤宏編『太宰治全作品研究事典』勉誠社一九九五年
- ・志村有弘・渡部芳紀編『太宰治大辞典』勉誠出版二〇〇五年

## 本文テキスト

- ・『太宰治全集3 小説2』筑摩書房、一九九八年
- ・『太宰治全集4 小説3』筑摩書房、一九九八年
- ・『太宰治全集7 小説6』筑摩書房、一九九八年
- ・『太宰治全集11 追想』筑摩書房、一九九九年
- ・『小林秀雄全作品14「実朝」』新潮社、二〇〇三年
- ・太宰治『走れメロス』新潮文庫、二〇〇三年版
- ・太宰治『惜別』新潮文庫、二〇〇四年版
- ・太宰治『きりぎりす』新潮文庫、二〇〇五年版

## 史料

- ・黒板勝美他編『国史大系32・吾妻鏡（前編）』吉川弘文館、一九六四年
- ・『新訂増補 国史大系 吾妻鏡第二』吉川弘文館、一九八六年
- ・五味文彦・本郷和人編『現代語訳 吾妻鏡7 頼家と実朝』吉川弘文館、二〇〇九年

- ・五味文彦・本郷和人編『現代語訳 吾妻鏡8 承久の乱』吉川弘文館、二〇一〇年

## 書籍

- ・『国文学 解釈と教材の研究』学燈社、一九六七年
- ・日本文学研究資料刊行会編『太宰治』有精堂出版、一九七〇年
- ・『太宰治全集 別巻』筑摩書房、一九七二年
- ・津島美知子『回想の太宰治』人文書院、一九七八年
- ・『国文学 解釈と鑑賞』一九八七、至文堂
- ・吉本隆明『源実朝』ちくま文庫、一九九〇年
- ・志村士郎『源実朝：悲境に生きる』新典社、一九九〇年
- ・『佐藤泰正著作集5 太宰治論』翰林書房、一九九七年
- ・安藤宏『太宰治』若草書房、一九九八年
- ・山内祥史編『太宰治研究 5』和泉書院、一九九八年
- ・細谷博『太宰治』岩波新書560、一九九八年
- ・新潮日本文学アルバム19 太宰治』新潮社、一九八三年
- ・山内祥史編『太宰治研究 12』和泉書院、二〇〇四年
- ・新潮文庫編『文豪ナジ 太宰治』新潮文庫、二〇〇四年
- ・佐藤泰正 佐古純一郎『漱石・芥川・太宰』朝文社、二〇〇八年
- ・山内祥史編『太宰治研究 19』和泉書院、二〇一二年
- ・山内祥史編『太宰治研究 21』和泉書院、二〇一二年
- ・東郷克美『太宰治という物語』筑摩書房、二〇一三年
- ・『生誕一五〇年 太宰治展——語りかける言葉——』公益財団法人神奈川文学振興会、二〇一四年